



### ボーペンニャンの精神

新潟県立長岡高等学校 2年 渡辺 晴海

「運転手さんたちは、重い荷物を持っている人を見かけたら、バス停じゃない場所でも停まってあげるんです。」

最終日に JICA 職員の方がこう教えてくださり、ラオスらしいと感じた。たった一週間の滞在でも、この国には助け合いの精神が息づいているのが分かる。

ラオスには「ボーペンニャン」という言葉がある。「大丈夫」「どういたしまして」という意味だ。研修中、助けてくれた方にお礼を言うと、どの人も「当たり前のことをしてだけ」というふうに笑顔で「ボーペンニャン」と返してくれた。私はラオスの人々から、この言葉に込められた「困った時はお互い様」という温かい心を教わった。

一方で、このように周囲を思いやりながら生きてきたこの国の人々がどのような発展を望んでいるのかと、考えさせられた。バスが度々バス停以外の場所に停まっていたら、交通の利便性は改善されないうえ、利用者は増えず、バス公社の収支も合わなくなってしまうだろう。だからといって、日本のように正確なダイヤにこだわれば、助け合いの精神性は失われてしまうかもしれない。ラオスの人たちの考えを尊重しながら事業を進めているという JICA の職員の方々の話が心に残った。

「あなたの国は経済的に遅れているから、こんな取り組みが必要です」という押し付けの協力ではなく、相手が大切にしている幸せの形や価値観を理解し尊重し、ともに汗を流すという考え方でいなくてはと、国際協力を志す上で強く思う。